

## 『性靈集』にみる空海の手論について

了德寺大学芸術学部 藤瀬 礼子

### A Study of Calligraphies in “*Syoryoshu*” by Kukai

【Keywrod】 Kukai *Shoryoshu* calligraphies

#### 【Abstract】

Kukai entered Tang (China) in 806 when the Emperor Tang Xianzong ruled. Receiving ascetic trainings, Kukai learnt and enriched his insights in calligraphy. The book *Syoryoshu* presented a part of it. *Shoryoshu* bears many of his poems and Vajirana philosophy as well as his study of calligraphy as fine arts. They are positioned as the beginning of academic study of the Art of Calligraphy. In his discussions presented in 805 and 807, the art of calligraphy and letters was associated with Confucianism, through which Kukai implicitly told Emperor Saga the idea of noblesse oblige with humble and modest language. With extremely cautious words, he preached his philosophy through the calligraphy as a superior to the emperor. He repeatedly positioned himself as a Buddhist monk to isolate himself from the civil world, whereby he successfully detached himself from political ties, and secured his liberty of speech. He used to be registered in the *Daigakuryo* (an institute to train the sons from aristocratic families to a bureaucrat), and he quit. He introduced the Tang art of calligraphies and gave lessons in the art of calligraphy, firmly standing on his position of a monk. To interpret this dual approach, emphases are placed on his basic viewpoint that the letters are capable of moving and shaking people. It explains that his viewpoint on the letters led him to the conclusion that he could take a leading position and able to guide Emperor Saga in ruling the country with his unparalleled knowledge of letters.

## 緒言

空海(774-835)は日本における随一の能書家といっても過言ではない。しかし彼の本道は、書道ではなく仏教である。唐の憲宗の元和年間に入唐、仏道の修行の傍ら、書についても唐人からの教えがあり、これにより書に対する見識を高めた。『性霊集』にはその一端が表されている。その著は弟子の真済(800-860)によって編纂されており、すべて十巻、正しくは『遍照發揮性霊集』と称する。ここには空海の詩文、密教思想などが多く収められているが、その中において、書に関する空海の見解がいくつか示されている。のちの『夜鶴庭訓抄』や『入木抄』のように書論としてまとまった一冊ではないが、日本の書論の開闢であるので、散見する書の見解を考察し、空海の書の理念を明らかにしていきたい。

### I 『性霊集』序にみる空海の漢文の素養について

『性霊集』をみると空海の基礎には漢学が備わっていることがわかる。延暦8年(789)、空海15歳のとき、桓武天皇(737-806)の皇子である伊予親王(?-807)の師であった阿刀大足に『論語』『孝経』などを学んでいる。延暦11年(792)、大学寮に入り、明経道を専攻して『春秋左氏伝』『毛詩』『尚書』などを読んでいた。大学寮は唐の文化が流入する9世紀から10世紀が最盛期であったが、この大学制度は唐の制度を取り入れたものであり、律令官僚の育成がその目的である。したがってその教育は儒教を基盤にしており、空海の属していた明経道は、儒教の経典を学ぶことになる。音と書は明経道を補助するために設けられていた。<sup>1)</sup>

延暦12年(793)、大学寮を出て山林において修行を積んだとされるが、空海が唐に向かって延暦23年(804)5月12日、難波津を出航することになるが、唐における活動の基礎学習は大学寮においてすでに習得されていたと考えられる。

『性霊集』の序文には

青襟にして槐林の春秋を摘み、絳帳にして山河の英萃に富む。遂に則ち域中の近智を陋しみて、超然の遠猷を慕ふ。俗を出でて真に入り、偽を去りて貞を得たり。<sup>2)</sup>

と、空海が大学寮におけるの学問にとどまらず、俗世を捨てて真理を求めたことが記されている。官僚としての道が約束されていた大学寮における学問から脱却するには何らかの決意があったからに相違ない。唐における大学制度は国家統治のために儒教が用いられたため、儒教が担う役割は大きかった。一方、わが国の大学制度における儒教の地位の実態は、政務を行うための教養として必要不可欠なものである、中流・下流貴族の立身出世のためのものであった。空海は自身の真理を儒教には求めず、仏教に求めたのであるが、いたるところに儒教思想や語句が記載されておりその影響の大なることは明らかである<sup>3)</sup>

詞翰俱に美にして、誠に東方の君子風を興せり。(序)

空海の用いる言葉とその書は美しく、東方の君子であったと述べられているが、詩文の格調は高く、文字もこれに伴うものであった。「君子」とは、学識・人格ともにすぐれた立派な人の意味であるが、この語は儒学の経書のいたるところに見えるものである。当時は

詩文を書すにも、漢字を使わねばならず、おのずと儒学の典籍の影響を学問に携わるものは受けていたのである。社会において文書のスタイルは漢文が正道であり、漢文の素養を官僚ならば誰でも持っていただろう。<sup>3)</sup> 大学寮の制度をみても漢文を習得しなければならないことがわかる。くわえて書の習得は重要である。述べ著したい事柄を文字にし、しかるべき紙、板、絹に書き付けるのである。文字が読め書けるというのはインテリであり、しかも文字をうまく書くというのは貴族社会において欠くべからざる重要な要素であった。歌の交換をするにも文字の美はついてまわり、いくら歌がうまくとも書かれた文字がうまくなければ面目が立たない、つまり歌を送った相手に嫌われてしまうのが常である。そこで子をもつ親は書の名手を傍において祐筆をさせたのである。しかし、こうした私的な歌の贈答などは祐筆でよいが、公的な場面でしかも君子たるもの漢詩漢文を自ら撰し書すことができなければその役割を果たすことができない。空海は官僚一族の出身であり、父は佐伯直田公、讃岐国の豪族で讃岐国造で多度郡一带を支配した郡司であった。母は阿刀氏の玉依御前で、阿刀氏は歌にすぐれ、学者を輩出している知識階級であり、空海の叔父である阿刀大足は桓武天皇の皇子伊予親王の講師をした人物である。

空海の漢文の能力はすばらしいものであり、詩文の巧みなことは序にしめされている。

或いは煙霞に臥して独り嘯き、意に任せて賦詠し、或いは天問に対へて以て献納し、手に随つて章を成す。慕仙の詩の、高山風起り易く、深海水量り難し、又神泉に遊ぶの、高台は神構にして人力に非ず、池鏡は泓澄として日暉を含むが如きに至りては、比興争ひ宣べ、氣質衝揚し、風雅の勸戒、煥呼として観る可し。

ここで着目するところは空海の作る詩文を『詩経』に重ね合わせて評している点である。詩の六義は風雅頌賦比興であるが、このうち比、興、風、雅の語をあげて詩の作法にかなった詩であるということをついたものである。比と興とはレトリックのことで作詩の巧みさを象徴する語であり、風と雅は内容の別であり、風は各地の民謡を採録したもの、雅は天子が諸侯を集めて公卿を饗するときの詩で音楽が伴った。ことに風は単に民謡としての習俗的側面をもつのみならず、ここには教化や風刺が内包されている。『詩経』の大序に「風風也。教也。風以動之。教以化之。」と詩は風が物を動かすように詩も人を動かし教え導くものであるとある。

『筆論』『筆経』は、譬へば詩家の格律の如し。詩は是れ声を調へ病を避くるの制有り。書も亦病を除き理に会ふの道有り。詩人、声と病とを解せざれば、誰か詩什を編まん。書者、病と理に明らかならざれば、何ぞ書評に預からん、と。又詩を作る者は古体を学ぶを以て妙と為すも、古詩を写すを以て能と為さず。(勅賜の屏風を書し了へて即ち献ずるの表並びに詩)

書論について展開しているなかで作詩の方法を述べているものであるが、詩は声すなわち音を整え、詩病を避けなければならないとしている。詩病とは詩の声律において禁じられているもので、平頭・上尾・蜂腰・鶴膝・大韻・小韻・傍紐・正紐は八病とされ、聴官を不快にするものとして避けられてきた。

夫れ其の詩賦哀讚の作、碑誦表書の制、遇ふ所にして作り、草案に仮らず、纒かにするに競ひ把らざれば、再び之を看るに由無し。(序)

空海は草案を作らずに詩・賦・哀・讚・碑・誦・表・書を制作していたことが分かる。すでに心頭にてあるものを文字にして表現しているのである。詩も天皇に奏上する文章もすべて完全に構築され、さまざまなことに対する理念がしっかりと定まっていたということになる。

真済の本書編纂の意図は、そうした空海の片鱗にふれ、空海の傍らにすこしでもいる心地をなかまの僧侶らにもってほしいということである。その内容は詩文、宗教、書など幅広いが、このすべてにおいて空海の実験があるということである。

## II 弘仁3年までにみる書論の特徴

空海の実験が見えるものは、そのほとんどが嵯峨天皇(786-842)に宛てられている。したがって先にみたように美辞麗句をならべ、謙遜の語をしきりに用いているが、それだけに空海の実験としたことは明らかである。

当に今堯日天に麗き、薰風地に通ず。垂拱無為にして徳を頌すること街に溢てり。(劉希夷が集を書して献納する表)

嵯峨天皇を堯になぞらえ尊崇した態度を示している。堯は帝嚳高辛氏の次子である。自らは質素な生活をし、農業の知恵を人々に授け生活ができるよう政治を行った。後継者は実子を用いず、天子として相応しい人物を探し、自分の娘をそこへ妻としてやり信用にたる人物であると分かると天子の位をそれに譲った。それが舜である。(『史記』五帝本紀) また、伝説に、堯の治世に一度に十個の日輪が現れて、農作物を焼かれてしまい、人々は食えることができず、さらに、数々の怪物が人々を害した。そこで堯は、弓の名手である羿に命じて怪物たちを退治させ、さらに十個の太陽のうち九つを射落とさせ、民を救ったという(『淮南子』本経訓) 話があるが、伝説であるのでこれを俄かに信ずるというのではないが、堯の人格、政治がこうした話を生むこととなり、人々の堯に対する評価が如実に表れたものであると考えることができる。

このとおり堯は聖王と称される誉高い人物である。嵯峨天皇を堯にたぐえることは最大の賛辞であるが、言葉上のことだけではなく嵯峨天皇の政治手腕への賛美であったと推察することができる。嵯峨天皇は皇位継承の際にも実子ではなく異母兄弟である大伴親王(淳和天皇)(786 - 840)を皇太弟にし、さらに権力闘争においても巧に対応し、退位後も天皇の皇位についても権力を振るった。皇子皇女は多数おり、その多くには姓を与えて所謂臣籍降下させている。

嵯峨天皇が即位していた弘仁は宮廷文化の盛んな時期であり、政治的側面のみならず、嵯峨天皇自身も漢文にすぐれ、書は三筆の一人に挙げられるほどの名人であった。政治的側面のみならずと述べたが、政治家として漢詩文の素養は当然もっておらねばならず、漢詩文だけでなく和歌などがうまくできるというのは為政者としての格の問題に関わるもの

である。政治と文化・文学を切り離して考えてしまいがちであるが、政治に関与するものとして文学の内容の高さはその存在を誇示するために必要不可欠であったということは、残されている文学作品の数々を見ても分かることである。文学の能力が高いということは、必ずしも天皇に限らず、貴族においても羨望の的となるのである。空海の詩文を真済は賛美していたのも、特殊階級としてはそれが当然必要な要素の一つであったからにほかならない。むしろ政治と文学は不可分であったといってもよい。<sup>4)</sup>

『性霊集』にみる空海の手書に関する内容が記されたもののほとんどが嵯峨天皇に宛てられたものである。空海の手書に関する記載が見られるものを記述された順に記してみる。

「勅賜の『世説』の屏風書し畢つて献ずるの表一首」大同4年10月3日

「劉庭芝が集を書して奉献する表」弘仁2年6月27日

「劉希夷が集を書して献納する表」弘仁2年6月27日

「筆を奉献する表」弘仁3年6月7日

「春宮に筆を献ずるの啓」弘仁3年

「梵字並びに雑文を献ずる表」弘仁5年7月28日

「勅賜の屏風を書し了へて即ち献ずるの表並びに詩」弘仁7年8月15日

このうち「春宮に筆を献ずるの啓」は桓武天皇の第3皇子で、弘仁元年(810)嵯峨天皇の皇太弟となった大伴親王(のちの淳和天皇 786-840・在位 823-833)に宛てられたものである。大伴親王はこのとき24歳である。

上奏文の手書された年代を見てみると、大同4年は、弘仁に改まる年であり、あとは弘仁2・3年に集中していることが分かる。その後はおよそ2年おきの弘仁5年と7年に著されている。ちなみに弘仁7年は空海が高野山に金剛峰寺を開基した年である。とりわけ弘仁5・7年に記されたものは書論としても掘り下げられたものである。

大同4年の「勅賜の『世説』の屏風書し畢つて献ずるの表一首」には、謙遜の辞がほとんどであり、空海の手書の知識を伺えるところは

寧ろ現鬼墨池の才、跳龍返鵲の芸有らんや。

である。蒼頡が文字を作って鬼を泣かせ、王羲之の龍がおどり鵲が飛ぶような書ではないと述べており、これは蒼頡の文字をつくった能力と、書聖である王羲之を高く評価するものである。

弘仁2年のものに「劉庭芝が集を書して奉献する表」「劉希夷が集を書して献納する表」がある。

王昌齡が詩の格一卷。此は是れ、在唐の日、作者の辺に於て偶此の書を得たり。古詩の格等は数家有りと雖も、近代の才子切にこの格を愛す。(劉希夷が集を書して献納する表)

と述べ、古詩よりも唐の時代の王昌齡の詩が当時のインテリには受け入れられていたという在唐の現状を紹介している。古いものだけに固執するのではなくその時代の流行を取り入れる姿勢が窺える。

貞元の英傑の六言の詩三卷。元は是れ一卷、書様大なるに縁って、卷則ち随つて大なり。今三卷に分つ。文はこれ秀逸の文、書は則ち褚臨王の遺体なり。(劉希夷が集を書して献納する表)

空海は王羲之をあげて賛美する言がみられるが、ここでは褚遂良の書体に拠ったといっている。やはりここでも唐という新しい時代を摂取する試みが明らかである。このほかに、飛白の書一卷。亦是れ在唐の日、一たび此の体を見て試みに之を書す。(劉希夷が集を書して献納する表)

飛白体への挑戦が分かる。ここではすべてが唐という時代に何が流行っているか、そして前時代とどう違ったかということに献上するという機に、紹介していることがよく分かる。そうして新たなものを吸収する姿勢をあきらかにしている。

また空海は筆についてもこだわりの姿勢を示している。

弱翰をもって強ひて書す。郢翰が巧思なりと雖も鉛刀をもって妙を尽くさんや。ただ意に勝はず、深く以て悚歎す。(劉庭芝が集を書して奉獻する表)

「弱翰」すなわち腰の弱い筆を用いたくなかったことがここに記されているが、おそらく空海がこのとき必要としていた筆は唐の巻筆といわれるものであろうと思われる。<sup>5)</sup>わが国にある最古の巻筆ものが正倉院に収蔵されているが、巻筆の製法は現在、中国には伝わっておらず、日本において巻筆を作られている職人がおられる。滋賀県にある攀桂堂、第十五代藤野運平氏にその製法を聞き、実際に巻筆を見た。そしてその筆を使ってみると、まるでその鋒先の弾力が違う。やわらかいのではなく跳ね返ってくるような弾力、強さをもっている。<sup>6)</sup>

良工は先づ其の刀を利くし、能書は必ず好筆を用う。刻鏤、用に随つて刀を改め、臨池、字に逐つて筆を変ず。字に篆隸八分の異、真・行・草藁の別あり。臨写規を殊にし、大小一に非ず。物に対し事に随つて其の体衆多なり。(春宮に筆を献ずる啓)

ここでも筆は好い筆を使うべきであることを刀にたとえて説明をしている。筆は文字の種類と大小を鑑みて使うことを言っている。

海西に於て聴き見し所、此の如し。其の中に大小・長短・強柔・斉尖なる者は、字勢の麤細に随つて摠て取捨するのみ。(筆を奉獻する表)

筆の使い分けについては唐において習得したものであるとしている。

弘仁2・3年のものは、唐における書の流行や唐において習得してきた筆や紙の用い方の紹介にとどまっており、以下に見る弘仁5年の「梵字並びに雑文を献ずる表」と弘仁7年の「勅賜の屏風を書し了へて即ち献ずるの表並びに詩」とは明らかに内容の異なるものである。

遣唐使よって唐の文化がもたらされたことはわが国の文化の成熟、発展に大きく帰依したことというまでもない。書においては空海一人の手によって唐の書事情が明らかにされ、空海は日本における書の先駆者としての地位を確立していた。唐で使われていた道具を再現し目の前にあるというのは、平安時代前期においては画期的なことであつたに違いない。

筆一つにしてみても新鮮な情報であったであろう。筆は書には欠くべからざる用材であり、それによって書かれる文字が変化する、文字によって筆を変えるということはそれまでは常識になっていなかったことがその文面から推察できる。これらは空海が唐の書に関する事柄を積極的に摂取している姿勢ことがよく分かるものであり、日本の新たな書を導いたパイオニアとしての地位を確立したといえる。

### III 文字の作用の理論

書とは文字とはどのような作用をもっているかを述べ、その重要性を嵯峨天皇に述べている。宗教家であり、文学の才の高い人であるが、そうした立場のものが、自身の体得した思想にもとづいて書に対峙していることがわかる。

書については本道ではないとし、

空海元より観牛の念に耽りて、久しく返鵲の書を経つ。(勅賜の屏風を書し了へて即ち献ずるの表並びに詩)

空海は緇林の朽枝、法海の爛屍なり。但鉢錫を持して以乞を行じ、林藪に吟じて観に住することをのみ解れり。(勅賜の『世説』の屏風書し畢つて献ずるの表一首)

余、海西に於て頗る骨法を閑へり。未だ画墨せずと雖も稍規矩を覚れり。然も猶定水の澄浄を願つて飛雲の奇体を顧みず。心表に棄置して鑒写に齒せず。(劉庭芝が集を書して奉獻する表)

あくまで仏道の傍らの書であるということを述べる箇所がいくつかみられる当然のことながらここにはおおいに謙遜の態度が含まれているのであり、書の勉強をしなかったのではなく、むしろそれなりの手ほどきをうけ、かなりの水準にまでたっしたものの慇懃の態度である。<sup>7)</sup> この手紙を出した相手が嵯峨天皇であるので、そうした態度はとくに大きい。「余、海西に於て頗る骨法を閑へり。未だ画墨せずと雖も稍規矩を覚れり。」で分かるように、唐において書を習い、それなりの方法を習得したということが示されている。しかし、「水の澄浄を願つて飛雲の奇体を顧みず。」と仏道が本道であるので、書は顧みなかったとして、ここでも自分の立場を明確にしている。

夫れ右軍功を累ねて猶し其の妙を得ず。衆藝沙を弄びて始めて其の極に会へり。

自外の凡庸、何ぞ点画の奥を解らむ。(勅賜の屏風を書し了へて即ち献ずるの表並びに詩)

書はやはり積み重ねが大切であることを王羲之でさえ練習をしてもなかなか書の妙を得ることができなかつたと述べている。あらゆる藝事は練習に練習を重ねなければその極致にいたることはできないという。そうしなければ普通の人間が書の奥義を理解することなどできないと述べている。<sup>8)</sup>

空海はいたるところで僧であるゆえ書を書くことがなかつたなどと繰り返し述べており、これは謙遜ととって、その言葉のとおりでないことは文章が書に関して興にのつた箇所でも明らかとなる。

此属臨池の次でに写し得て奏上す。(劉希夷が集を書して献納する表)

と書の時間をもっていたことが述べられている。

空海の文字に対する位置づけは「梵字並びに雑文を献ずる表」においてみるることができる。<sup>9)</sup>

沙門空海言す。空海聞く、帝道、天に感ずるときは則ち秘録必ず顕はれ、皇風、地を動かすときは則ち靈文聿めて興る。故に能く龍卦龜文は黄犧を待つて以て用を標はし、鳳書・虎字は白姫を候つて以て体を呈はす。於焉繩を結ぶこと廢れて三墳燦爛たり。木を刻むこと寝んで五典鬱りに興る。明皇之に因つて風を弘め化を揚げ、蒼生之を仰ぎて往を知り来を察す。戸庭を出でずして万里目に対ひ、聖智に因らずして三才数を窮む。古を稽へ故きを温ね、我より範を垂るること書に非ずして何ぞや。

況んや復悉曇の妙章、梵書の字母、体、先仏より凝り、理、種智を含めり。字は生の終を絡ひ、用、群迷を断ず。所以に三世の覚満尊んで師とし、十万の薩埵重ずること身命に逾えたり。満界の宝は半偈にも報い難く、大いなる哉、遠い哉。

これをみると、帝道が天と感応したときには必ず秘録が必ず顕れ、皇風が地において行われたときは靈文ができるとして、文字は文字として作られたとは考えておらず、皇帝の道が正しく行われたときに文字はできるとしている。その根拠として、伏羲や黄帝の出現によって龍馬の八卦や靈龜の龜文ができ、鳳書・虎字は白氏少昊と姫氏周王の出現をまっけて形になって現れたというのである。伏羲は三皇の一人で『易経』によれば八卦をつくったとされ、漁獵法を民衆に教えた聖王である。黄帝は五帝の一人で初めて漢民族の統一国家を造った英雄である。いずれも伝説上の人物であるが、中国の歴史における偉大な立場である。姫氏周王、すなわち周の文王は徳が高く、礼をつくして賢者に遇した人で、その人柄や政治は、儒教者の手本として賞賛される位地にある。文字は天子の広大な恵、鴻化と密接に関連づけており、高德のないところに文字は現れないと論じている。結繩については評価が低く、結繩と天子の徳とを関連づけているところはない。結繩の時代において、評価している天子がいなかったことを意味する。前提は文字が単独で存在するのではなく、あくまでもその時代の聖天子あってこそその文字であるという理論である。

「三墳」は伏羲・神農・黄帝の書をいい、「五典」は少昊・顓頊・高辛・唐・虞の書をいう。この三墳五典によって皇風を広げていき、人民を教化することができるのである。したがって「聖智に因らずして三才数を窮む」ことができるのである。すこしばかり優れた知恵では人民を治めることができない。天子たるもの天地人の運命を全うすることができるのである。過去をよく鑑み、そうして世に規範を示すことができるものこそが書であると述べるにいたっている。

以上見たように漢字においてもそうした文字の作用があるのだから、「曇の妙章、梵書の字母」はいうまでもなく素晴らしいという。梵字は種智、すべての存在の相を知る仏の全知をもっているのであり、文字は永遠であり、その働きはあらゆる迷いを断つもので、文字の意味と作用とは偉大であるという。



伏して惟れば天皇陛下、貫三に号を表し、滅五に首を称す。道、規矩に邁ぎ、明、烏兔に齊し。露、文下に沈んで、六合無為なり。風、琴上に動いて、一人垂拱す。玉燭調和し、金鏡照耀す。所謂輪瑞の運、今に見つ。

空海は天皇に対して大変へりくだってはいるが、その論ずるところには天子たるものいかにあるべきかということ、中国の歴代の聖天子の名を連ねながら暗に教戒をするものであるが、最終的にはインドの伝説の理想的国王である転輪王に帰着させている。

空海四十歳の感慨が「中寿感興の詩並びに序」に示されている。

覚日なる者は本より常なり。妄時なる者は代謝す。撫塵は昨なりしに、不惑は催す。何ぞ忍びん、日天矢のごとくに運びて、人の童顔を奪ふに。不分や、月殿疾く来りて、人をして変異せしむること。士流は是の日強占し、羅門は是の歳勇進し、俗家は之を賀して酒会するも、方袍何事をか是とせん。目を閉ぢて端坐し、仏徳を思念するに如かず。

「不惑」とは四十歳のことであるが、膾炙されているように『論語』為政篇の「四十而不惑」の語である。ここでは君子として然るべき年齢においてどうあらねばならないかということが示された章であるが、この不惑になってあらためて自らの進むべき道を宣言したのであるが、四十歳といえば道が定まってすでに何らかの功績をあげている年齢である。

「士流は是の日強占し」とは官僚らは四十歳になっても気力旺盛に宮仕えをしの意味であるが、一度は中央官僚の養成機関に身を置き、親族には名だたる高級官僚を排している環境にあつて、政治の現実を見てきたに違いない。政治権力に翻弄されるのは人民であることをよく理解しており、権力闘争、出世の道のみを望む貴族には侮蔑の思いを抱いていたと考えられる。「羅門」は四十歳にして仏道に修行し、「俗家」は四十才になったことを祝福するが、一人の僧として何をするのが正しいのかと問い、目を閉じて正しく座り、仏徳を追究することであると断定している。つまり、官僚は日々一生懸命宮仕えに生きるも出世のため齷齪し、バラモンが修行に専念し、俗人はただ四十の齢をむかえたことだけを喜んでいるが、いずれも正しい道を歩んでいるのだろうか、僧侶としてすべきことは仏の徳を思うことである。僧という立場は何者にも上にあつて崇高、孤高の地位にあることを自負する態度をうかがい知ることができる。この後には

冀くは生盲の徒をして三昧の法仏は、本より我が心に具はり、二諦の真俗は、俱に是れ常住、禽獸卉木は、皆是れ法音、安楽觀史は、本来胸中にあるを頓悟せしめん。

とあり、「生盲の徒」には仏の世界にも俗な世にも「常住」永遠不変が存在し、極楽浄土は心の中にあることを分らせたいといい、万人に仏の道が存在していることを述べている。<sup>10)</sup> 空海にとって仏道が最上位であり、これをあらゆる人に悟らせることが彼の希望であるのだ。

また、文字と儒教とを関連させた論が「勅賜の屏風を書し了へて即ち献ずるの表並びに詩」に見え、

君臣風化の道、上下の画に含み、夫婦義貞の行、陰陽の点に蔵む。客主揖讓し、弟

昆友悌あり。三才変化し、四序生殺す。尊卑愛敬し、大小次第あり。隣里和平し、寰区肅恭す。此等の深義、悉く字字に縊む。

と君臣風化、夫婦義貞、客主揖讓、弟昆友悌、三才四序、尊卑、大小、隣里、寰区の道理が一字一字にすべてこめられているとして、字を人の秩序、物の序列、天下の治め方にまでおよばせて、書を儒教概念によって説明している。さきに見たように空海には漢文の素養が十二分にあるので、儒教概念が備わっているのであるが、文字の構成、点画の書き方を単なる技法的な説明をするのではなく、わざわざ儒教の語を用いて説明しているところに意味があるのではないだろうか。これは明らかに嵯峨天皇という為政者を意識している証拠である。

#### 結語

天皇に謙遜の語を用いながらも、弘仁 5・7 年の内容は書や文字を儒教思想と関連付け、暗に王者たるもの如何に政治を行うべきかを論ずるものであった。述べている言葉はじつに丁寧であるが、自らの見解を披露している上位の弁である。繰り返し僧であると述べたことも、俗世間にはいないと主張することによって、自分の存在を自由にさせしめたと考えられる。空海は大学寮という官僚とは組織の一つに所属したことがあったが、空海はこうした組織から離れた人であるということを認識しておく必要がある。アイデンティティーの確立のためには、組織においては成し遂げることができなかつたのではあるまいか。

僧であると自己アピールをしながら、書の手ほどき、唐の書についての紹介をしているのであるが、最も重要な点は文字には人を動かす力があると考えていたことであり、その考えがあったからこそ空海の意識は指導的地位にあり嵯峨天皇を導こうするものになったと把握することができる。

(2008 年 11 月 25 日 稿)

#### 注

- 1) 桃裕行『上代学制の研究』(吉川弘文館 1983 年 3 月 20 日) 参照。
- 2) 書き下し文の引用は『弘法大師全集第六卷』(筑摩書房 1990 年 1 月 20 日) による。
- 3) 「爰外戚舅阿刀大足大夫等曰、縦為仏弟子不如出大学令習文書立身、(注は略す) 任此教言受俗典少(ママ)書等及史伝兼学文章」とあり身を立てるためには儒教が大切であったことが分かる。(『弘法大師伝記集覧』「弘法大師行化記」29 頁 密教文化研究所 1970 年 6 月 1 日)
- 4) 津田左右吉氏は奈良朝から平安朝にかけて知識社会においてシナ文によって書きあらわそうとするようになり、平安朝までは官府の公文にも法令を記すにもみなシナ文が用いられ、官吏の地位にある学者の任であった。文章を書くことで自己の能力をあらわし、官府としてはその文華を示したと述べているが、当時の学者はシナ思想を思想として理解しなかつたと主張している。(『シナ思想と日本』「シナ思想のうけ入れかた」岩波

書店 1974 年 3 月 10 日)

- 5) 王益鳴氏は「蔡中郎と空海の書論」(『日本古代文字と東アジア』田中隆昭編 勉誠出版 2004 年 3 月 30 日)の中で「詩と書とは自分の『病』があり従事者は自分の従事した対象の『病』について深刻に瞭解することが必要とされるかそうでないと深遠なる境界に達成することができない」と空海が考えていたと述べている。
- 6) 駒井鷲静氏は書道関係上表文十種を挙げ、空海がもっとも心をこめて書いたものは弘仁 7 年 8 月 15 日に書写した「勅賜の屏風を書し了へて即ち献ずるの表」であるとし、799 字と文字数も最多であるとしている。(「空海の書論と作品」雄山閣 1984 年 11 月 20 日)
- 7) 田淵実夫氏は「空海が嵯峨天皇に献筆したのは、大仏殿の完成から六十年後のことだが、その間にも唐筆は改良されていたので、空海は献筆の勅命にも応えたのであろう。しかし、基本的にはその製筆法は天平筆とさして変わったものでなかったであろう。そのことが思われるのは、天平筆も空海の製筆も、共に巻筆であったことである。ただ、空海の製筆は雀頭型のものよりは相当長鋒で弾力性に富んだものであったらしいことが空海の墨蹟から察せられると書家の多くは言うのである。」(『筆』法政大学出版社 1998 年 7 月 1 日)と、空海の献上した筆は巻筆であることが述べられている。
- 8) 中田勇次郎氏は「弘法大師の書藝」(『中田勇次郎著作集第五巻』二玄社 1985 年 7 月 30 日)において、空海は「単なる書人ではなくて、元来宗教家としての書の立場に立って、内面的な要求の上から、唐土の書の精華を取り入れたのであって、ただ新書風の流行に追随したものではない」と述べており、書人としての側面のみを見るのではなく、必ず宗教家、仏門に帰依した人物であるということを基底に考えなくてはならない。
- 9) 山折哲雄氏は「夫れ、境、心に随って変ず。心垢るれば境濁る。心は境を逐って移る。境閑なるときは心朗かなり。心境冥会して道德玄に存す」(『性靈集』巻二)を引いて対象世界は自分の心のあり方に応じて変化する一方で自らの心が汚れていれば対象世界も濁ると解釈し、心が対象に向かって昂揚する働きが認められると考えている。(『日本人の心情—その根底を探る』「第二部日本人の超越的存在」日本放送出版協会 1997 年 5 月 10 日)
- 10) 中村不折氏は「梵字並びに雑文を献ずる表」を文字の義用の遠大であることを述べたものとし、空海の文字には梵字の筆意が含まれておりこれは空海の創意であると評している。(『弘法大師の書法源流』雄山閣 昭和 13 年 4 月 20 日)